



たより第56号目次

春のゆふべの小さき夢

西松 布咏

ちよっと困った?!

『春を味わふ』観賞記

荒木 基次

第三十三回美紗の会を終えて

本郷 公基

花の本分

川崎 隆章

赤坂での「江戸」体験

福岡 俊弘

平成十九年公演他

二月二日 NHK FM

ラジオ深夜便 こころの時代

(三味線に託した半生

西松 布咏

二月十七日(土)

第四回 季の会

風花舞う夜に唄う〜四季折々の唄と精進料理の出遣い

原宿 月心居

二月二十五日(日)

高島屋文化サロン〜江戸の粋を唄う

新潟岩室温泉 高島屋

三月二十四日(土)

第三十三回 美紗の会のつどい

美紗の会一門の演奏会

赤坂 泉クラブ

四月二十一日(土)

春を味わふ〜江戸の唄と懐石料理の出遣い

岐阜 たか田八祥

四月二十一日(土)

夜の愉しみ〜江戸の唄そして未来へ

多治見 ギャルリももぐさ

五月二十六日(土)

第六回 季の会

皇月闇の宵に唄う〜四季折々の唄と精進料理の出遣い

六月二十八日(木)

六時より

虎の門パストラル新館六階

NPO法人 鷹くらぶ 邦楽三昧

三昧線音楽のさまざまなかたちを唄う

十月二十日(土)

一時より

赤坂 泉クラブ

第三十四回 美紗の会のつどい

美紗の会一門の演奏会・交流会

春のゆふべの小さき夢

西松 布咏

そと秘めし春のゆふべの小さき夢

はぐれさせつる十三絃よ

与謝野晶子の「みだれ髪」の歌であるが、琴を三絃に置き換えた私の小さき夢は、桜どきに西行のよつに「願わくは花の下にて・・・唄うこと。」

今年には思わせぶりな寒暖の繰り返して、さぞ桜もいつ花開こうか心はくれたことだろう。そのお蔭で四月八日の宵に古流松應会千羽理芳家元お仲間の集い「屋形船で名残の桜を愉しむ会」は唄の文句そのままに「柳橋から小舟で急がせ、舟はゆらゆら波しだい」と夜風に吹かれながら三味の音と共に、大川を隔てた土手の桜を屏風に仕立て、江戸の春を唄うことが出来た。

そして小さき夢は十年前にさかのぼる。岐阜の歴史と織部美学の特殊性を世に広めたいとの趣旨で「オリベスク」と題したシンポジウムの発会式で松岡正剛氏の作詞に私が作曲した「織部好み」を唄ったことがある。その唄がきっかけとなり、いつか岐阜で唄いたいとの思いがようやく実を結び四月二十一日の「たか田八祥」での「春を味わふ」公演となった。江戸の唄と懐石料理のつどいの玄関先はしんと打ち水がされ、前日立ち寄った郡上八幡の川岸の柔らかな日差しのおかげで風に舞う桜と、日本唯一とつたわれる澄んだ吉田川の流れが心によみがえるようだった。やがて新緑の五月になると、毎夜鴉匠が篝火を灯しての鴉飼が始まる。春から初夏へと移る季節のはざまに江戸の唄を、日本座敷で目と耳と心で静かに味わっていただけたよつで嬉しかった。

その余韻にひたる間もなく、旅芸人よろしく三味線をかかえ着物の裾を翻し岐阜駅から多治見行き

きの列車に飛び乗り、夜の会場へと向かう。

やがて澄んだ空気が新緑をわたり、どこからともなく小鳥のさえずる民家「ギャルリももぐさ」へと。昨年の夏に訪れすっかり土間、板の間、畳座敷、縁側のかもし出す懐かしい空間に魅せられ、主の安藤雅信氏の「この古い民家で長年日本人が培ってきたものを手繰り寄せ、現代と結び直したい」という情熱に共鳴し、つくづくここで三味の音を響かせたいと思った。安藤氏は首をかきながら、「事の発端は映画である。川島雄三監督の「幕末太陽伝」に引き込まれ江戸時代にタイムスリップしてしまった。行灯や蠟燭の灯火の中で三味線を聞きながら酒を飲む。遊郭は文化の発信地じゃないか。フランキー堺の好演についてこちらで調子に乗ってしまい、百草での夜の情景を思い描いた。」とチラシに書いてくれた。そしてお互いの想いをメールに托した往復の末に「夜の愉しみ〜江戸の唄そして未来へ」となり、その日を迎えた春のゆふべのあたりは静かに闇がひろがっていった。私は江戸の遊女よろしく紅裏がちらり見える黒い幅広の綿の着物をまとい幕末の男達に囁くように唄えれば・・・なんて思っていたものの漆黒の闇に蠟燭の炎だけが揺れている中では、三味の糸と聲だけが響かないことを知った。唄うにつれて現世に染み付いた余分なものがつきつきと剥ぎ取られまっさらとなった裸体が透明な糸となって夜のしじま

に放たれてゆくように感じた。そしてまぶしい光が、喧騒の音が氾濫している現代に、見えるものが見え



ない、聞こえるものが聞こえない大きな喪失を確かに感じた。

そこ秘めし春のゆふへのちさき夢をはぐれさせたのは、やはり私にとっては闇の中に響いた三絃の音に他ならなかったのだ。

ちよつと困った？

## 『春を味わふ』観賞記

荒木 基次

昨年十月末に西松布喙師匠から電話があった。岐阜と多治見で演奏会をされるという。土地勘はないし、おまけに門弟どころか門前の小僧にもならぬ私でなければ運転手でもなんでも、と岐阜まで車を走らせた。

岐阜の料亭「たか田八祥」には、困ってしまうくらいお人柄の良い相谷さんが待ち構えていた。打合せもそこに美味しい料理をいただいて、満腹のまま多治見へ移動する。

多治見にはさる倶楽部で知合いの千古乃岩酒造の中島和子さんがいるのだが、相谷さんは中島さんと懇意な安藤寛さんという陶芸家がいるという。多治見では一軒家を移築してさまざまな創作活動をされている安藤雅信・明子夫妻の「ギャルリももぐさ」を訪ねる。安藤明子さんの創造的な衣服作品は知っていたのだが、「ももぐさ」を訪ねるのは初めて。興味津々に玄關土間に足を踏み入れる。カフェと座敷のギャラリーがなんともいい感じだ。布喙師匠が音合わせに一声出されると、ギャルリ中

の人々が聞きほれるように座りだした。庭をふとみると寒山拾得から抜け出てきたような老人が二人、「エエ声じゃねえ」と煙草を吹かしている。それが陶芸家の安藤寛さんと「鳥安」の清水さんだった。その後、このお二人のバイタリテイには困ってしまったくらい驚かされることとなる。というもうなぎの「澤千」で陶芸のお話から国内外でのエピソード満載のお話に笑い転げた後、宿泊地の柿野温泉まで案内していただいたのだが、山道をすこいスピードで疾走していく。こちらもスキーで行き帰りで山道運転には自信があったのだが、必死になってついていかなければならない。そして、ほんとに困ったことにはお二人が乗る軽自動車のパンパーにはしつかりと「紅葉マーク」が光っていたのだ。



翌日にはさかづき美術館で師匠の元お弟子さんの日比野光希子さんの作品展を覗く。そこで中島さんと再会。色々なところで人々がつながり、美濃が近いものとなっていた。

そんな昨秋の下見があったから、年が変わり、『春を味わふ』の春らしいピンク基調のチラシも出来、ポスターも送り、安心している、あつという間に演奏会当日を迎えてしまった。ところが困ったことに、春先の仕事が立て込み、休めなかったせいもあって風邪が抜けにくい。半病人の態で新

幹線の人となる。寝過ぎすと品川まで連れていかれるので、眠気覚ましに同行したわが社のデザイナーに、いかに師匠の生の声がいかに説明しながら行く。岐阜駅で東京の「美紗の会」の方々と合流。マイクロバスで「たか田八祥」へ乗り付ける。

受付で着物姿の日比野さんに再会。挨拶をかわしながら二階へ上ると、さあ困った。カメラポジションがないくらいにぎっしりのお客様が詰め掛けている。後で聴くと、お客様の中には岐阜周辺の邦楽関係やらその関係の業界の方々が多数お見えになっていたとか。やがて師匠の登場で座が華やぐ。語りも滑らかに滑り出し上々に見えたのだが、唄いだされてあれっと思っ。空調のせいなのか声が後ろの奥まで通っていかないようなのだ。困ったなと思いつつながら撮影に専念していると、さすが師匠である。春の宵のようにやんわりと観客を包み込んでいく。

小唄『並木駒形・笠森おせん・この先に・味』、創作『束の間』、織部好み、新内小唄『籠つるべ』、端唄『文弥くずし・宇治茶・鶴飼して』と、地元結みの唄と江戸の風情が交錯する。地唄『袖香炉』で、もうおしまいなのかと思つた途端、客席から「師匠、うそとまこと」が抜けました。『うそとまこと』の唄。おつと困ったと思いきや、さすがの師匠「もうつと早くに言つて下さればいいのに・・・」とやかに受けられる。やんわりとしたアンコ



ル代わりに「うそとまこと」が座敷を包んでいった。その後は、座敷を変えてのお食事。お酒も入って、皆の顔がほころびだす。御主人高田さんのユーモアたっぷり御挨拶で一気に座が温かいなこやかな雰囲気にも包まれ、先ほどの演奏の余韻が香り高い日本酒のようにそこそこで立ち上っていた。階下の受付ではCDが飛びように売れ、足りない分は予約をいただいたといううれしい悲鳴で困っていたそうだ。師匠の唄声と演奏は岐阜の専門家の方々にも心深く染み込んでいったようだ。「たか田八祥」の店先で名残を惜しむように挨拶が交わされ、バスは多治見へと出発。風邪のためにお酒を控えていたのだが、やはり多治見まではぐっすり寝入ってしまった。

山の中の一軒家という風情の「ギャルリももぐさ」に到着。「ももぐさファン」の方なのか、若い世代も増えて、開場前から多くの人が玄關先に並んでいる。今度は頑張つていいカメラポジションを押さえたのだが、さて困った。照明が和口ウソクの燭台だけだ。あたりは黄昏どきのいい雰囲気なのだが、座敷はほとんど暗さを増している。座敷に招き入れられると、各自の席の前に杉板と演目の案内がある。スタッフの方々が「お酒」か「お薄」と聞いて来られるのだが、お酒はじつと我慢の風邪引きカメラマンだった。

やがて着物姿も凍々しい安藤雅信さんのご挨拶で会が始まる。それにしても江戸の座敷にタイムスリップした雰囲気は極上なのだが、ピントがほと

んど見えない。こりゃあ、困った。そんな野暮は置いておいて、師匠の演奏が始まる。

第一部は江戸情緒。端唄『夕暮れ・柳橋から・花は上野』、

小唄『夜桜・薄雲大夫』、端唄

『忍ぶ恋路・二上がり新内』、

淀の川瀬』、新内小唄『夢の柳橋』、地唄『愚痴』とたつぷり

江戸情緒が空間にあふれた。

観客は身じろぎもせず聞き入

っている。カメラを放りだし

てお酒に行きたいのだが、ま

だ全然撮れていない。こりゃ

困ったというところで休憩。

第二部は「そして未来へ」

というところで西松布吹創作集

である。『きりぎりす・織部好み(詞松岡

正剛)・束の間に(詞西松布吹)・黒い肖

像(詩北園克衛)・ブルー(詩北園克衛)』

となんと聴いても聞き惚れる曲ばかり。師

匠の衣装もがらりとかわってモダンな黒

いドレスである。旧い幼稚園にありそうな

可愛い椅子にイサム・ノグチの和紙の照明

が灯されていた。演奏が終了したとき、去

りがたい雰囲気座敷を包んでいた。すつ

かり暮れなずんだ座敷を後にして、皆さん

満足げだった。打ち上げは「井ざわ」で和

気藪藪と始まった。やととビールが喉に入

る。風邪はなんとか持っているが、気分と

しては熱病が欲しい。若い衆に頼んだこと

で、パスの時間だというお知らせ。こり

ゃ、「今日一番の困った」だ。おまけにホ

テルへ帰ると全館禁煙だという。玄關外で

一服くゆらし、部屋に入った途端 風呂に

も入らず寝てしまった。

翌日は「美紗の会」御一行様は黙元や酒

蔵訪問だという。ところが風邪がまだ抜け



ていない。うつろな目をして大阪へ帰る無

礼を詫びた。帰りの新幹線では寝たいのだ

が感動で興奮したデザイン

ナーの話が止まらない。

結局、大阪駅までしゃべ

り通じた。昼前につ

いて、そそくさと自宅へ

帰って風邪薬を飲んだ。

半年も前からじつくり

用意し、演奏会も上々の

首尾だったのに、ひとり

風邪引きの困ったカメラ

マンであった。師匠、誠

に申し訳ありませんでし

た。演奏は、もうすつと

聴いていたくて仕方がな

い。これは困った。早く、次のご案内をく

ださい。

### 第三十三回美紗の会を終えて

会長 本郷 公墓

美紗の会も今回で第三十三回を数える

こととなりました。三十三は爰燦燦の「さ

んさん」でもあります。美紗の会もここに

来て燦燦と輝いてきたと思います。現に今

日のおさらい会も有望な新人が参加され、

名取りの皆さんを始め、中堅、ヘテランの

頑張りもあり、大変盛り上がった良い発表

会であったと喜ばしい限りです。

ところで若い会員の方には余り関心が

ないかと思いますが、私のように古希を過

ぎた人間は夜なかなか寝付かれなかつた

り、早く寝ると夜中に目を覚まして朝まで

眠れないことがあります。現役時代なら翌

朝の会社のことを思っで早く眠らねばと

焦ったものでしたが、お勤めのない今はの

んびりと本を読んだりラジオを聴いたり

しています。私はNHKのラジオ深夜便と

いう番組が好きで、毎晩これを聴きながら

寝入ることにしています。

先日仲間と酒を飲んでいたら南こうせ

つの深夜便の歌「恋はるか」という曲が

かりましたので、この曲知っているよと

言

って歌い始めました。思ったより上手く歌

えないなと自己嫌悪になりかけていたら、

目が覚めました。丁度ラジオ深夜便でこの

曲が流れていました。いつものように、ラ

ジオをつけたまま眠っていたのでした。

ラジオ深夜便は私のような年寄りにと

って隠れた人気番組でもあります。特に朝

の四時から「こころの時代」とう番組があ

り、医師の日野原重明や作家の五木寛之、

田辺聖子、俳優の森光子、坂上二郎、その

他スポーツマンでゴルフの中嶋常幸やマ

ラソンの君原健二、それに僧侶や学者、画

家、音楽家、俳人等の芸術家、己の道を究

めた職人等がNHKのディレクターにイ

ンタビューを受けて自分の人生や哲学を

語ります。

この「こころの時代」に我ら西松師匠が

二月二日に出演され、「三味線に託した半

生」を語られました。昨年の出演者の中で

邦楽家は師匠一人だったと思いますので、

美紗の会にとって大変誇りであり、嬉しく

### 花の本分

川崎 隆章

皇居からみて国立劇場の裏手の奥まっ

たところに平河天満宮がある。大田道灌が

川越の三芳野天神から江戸城内に招いた

古い社が元で、家康公の本丸改修に際し城

外に移し、慶長年間、三代秀忠公が城郭拡

張された際、現在地に移されたという四百

年を超える古社である。

天満宮というだけあって、季節ともなる

と紅白の古梅が香りの良い花をチラホラ

咲かせるのだが、境内にはがっちりとした

ソメイヨシノも一本あって、千鳥が淵より

数日早く満開を迎える。

実物をご覧いただくとすぐにわかるの

だが、巨大な葱坊主のような枝振りであ

り、十年ほど前、境内を覆うほどの枝振りであ

ったものを、何を思ったかバツサリ打ち払

ってしまったのだそう、太い幹の先の方

だけが満開になる姿はまるで耳掻きの梵

天だ。立派な桜もこれでは形にならない。

いつしかこの桜の下で妻を張る者もいな

くなり、マンシヨンの間にぽっかりあいた

境内でひっそりと咲くようになってしま

ったという。幹が立派なだけ、よけい貧弱

に見える。かわいそうな桜ではないか。

弥生三月赤坂見附。泉クラブで美紗の会

のお弾き初めがあった。冷や汗をかきなが

ら出演を済ませ、師匠兄弟子同朋それぞれ

の芸と姿勢を学ぶ。古今東西の芸能の神様

に感謝を捧げつつ直会の盃を頂きながら

ぐるり見回すと、いつもの事ながらわが一

座は華やかで好い香りにつつまれている。

集えばいつも見事満開で、その中の一輪で

いることがとても誇らしく思える。それは年に二度の発表会や折々の集いのたびに思う。巧く演れたかどうかはマア個人的問題として、いろんな花がワツと集まって花を咲かせる事こそが大事なのだと思う。

どんな見事な幹も、花をつけなければ愛でられることはない。どんな立派な由来があっても、花がなければ誰も心を寄せてはこない。自分の事を申せば、ヘタでも花。盛大な中に咲けばそれは絵の一部になり、ヘタなりに人の心を喜ばせる。だから出来不出来に関係なく、半年に一度、恥をかきに舞台にあがることを大切に思っている。

我が一門は四半世紀をさらに数年越え、毎度お越しいただくお客様から立派な桜木だと御褒め頂けるようになった。花を育てる幹や、多くの花を抱える古い枝こそが、「本当は」立派なのだが、そこは見巧者に褒めて頂くとして、花が盛大に咲かなければ「大衆」は褒めてはくれない。だからこそ、一輪の花の負う責任は重大なのだ。小さな花でも、まず咲くことが大事で、しかも、一緒にワツと咲いてこそ、一輪の価値は高まる。それは神輿にしたってそうだ。どんなに神輿が立派でも、担ぎ手がいなければただの飾り物だし、担ぎ手の手がそろわなければ、その価値は高まらない。もちろん、芸種によっては古木に咲く一輪のような生き方もある。それも素晴らしい。古木の一輪だって、かつて花盛りだった歴史を秘めているから面白いのである。最初から一輪しか咲かない木とは別だと思ふ。

平河町の古い桜は、盛大に花をつける若い枝を打ち払われてしまった。古い幹、太い枝に何ともいえない残念がある。

桜をながめながら、巧くなるうと思う以上に「咲く花の自分」を悟った。咲かす事が桜木の誉であり、そこに集って咲く事こそまさに「花

の自分」に違いないのだ。

自分を尽くして咲き、人様から愛でられる。半年に一度こうして得る経験は、本当に価値のあることなのだと思ふ。

## 赤坂での「江戸」体験

福岡 俊弘

「見返り美人」などの作品で知られる浮世絵師菱川師宣の代表作に、「吉原の躰(てい)」という絵がある。言わずと知れた江戸の遊郭、吉原の案内書の挿絵として描かれたもので、そこにはどこかの廓の座敷で舞う遊女を中心に、大ぶりの盃を手にした酔客、それをもてなす別の遊女、鼓を打つ男、などなどの賑やかな景色が展開する。そして、その浮世絵の中には、正座して三味線を連れ弾く一組の男女もまた描かれている。

吉原ではなく、遊女はもちろん泥酔した客もいない(ほろ酔いの時間はあつたかも)、桜がよいよ待ちきれなくなった三月二十五日の赤坂。格子戸を一寸だけ開けて向こう側にいる夕霧太夫を覗き見るような気分、第三十三回美紗の会にお邪魔させていただいた。

正直に言えば、今もって、あの場に自分がいたことが信じられないでいる。若い人の頃は力強く、それでいて艶がある。姉さんたちのそれは、色と香。したたかできて可憐。そして、枯れていながら、なぜか華やかな趣のある諸先輩の声音、それになにより、「さくらさくら」を普通に奏で



ることすら覚束ない自分にとって、皆が自在に三味線を操る様は、奇跡を見るに等しいものだった。あつという間の五時間。こんなうっとりするような時間と空間がリアルなものだったなんて、どう考えても信じられない。江戸、だった。たぶんそのときこそは、江戸だったのだ。

「なんで三味線なんか始めたの?」この二カ月の間に、数え切れないほどの失礼な質問に遭った。「三味線・・・なんか」って。おそらく、自分と三味線のイメージがあまりにかけ離れているせいだろう。パソコン雑誌を生業としながら趣味がパソコン、好きな町が

秋葉原とては、そう思われても無理のないことかもしれない。ただ「いい音だった!」とある舞台上で聴いた三味線の音が、心揺さぶるほどに「いい音」だったのだ。本当にそれだけの理由で(三味線のお稽古を)始めたのだけれど、まさか、それが「江戸」に通じる扉だとは思ってもみなかった。

先の浮世絵の中には、江戸の様々な「音」が潜んでいる。客の発する濁声、太夫の「そつでありんすえ」みたいな色香漂つ声、鼓、唄、そして三味線の音。この「音」の世界に、

この先漫かってみたくなつた。・・・とつぱりと、・・・とつくりや。 (そんなわけで、頑張つて稽古していきますので、よろしくお願ひいたします)

## 編集後記

花の季節も終わり新緑の候となりました桜の花には思い出を誘われ、新緑の木々には新しい希望を感じます。

ゴールデンウィークは五月晴れが続きましたが、皆様どの様な楽しい時間をお過ごしになりましたか?

私はラッシュを避け、六日・七日に山の家に行きました。雨男の主人と一緒に・・・二日も雨でした。

たより56号は、これまでの体裁を一新しカラー版でお届け致します。今後更にたよりの充実を図つてまいりますのでよろしくお願ひ申し上げます。(大久保)



## たより第56号

発行者 美紗の会  
編集責任者 大久保 朋子

## 美紗の会

主宰 西松 布喙

稽古場 港区白金台三二二

白金台フレイズ三階

電話 (三四四一)二七二六

(五四四七)二四二二

http://www17.ocn.ne.jp/~misa5/